

浮浪者同然のクリス（主人公）は廃棄されていたボロボロなビートルを自分で直しタクシー運転手として生活水準のギリギリなその日暮らしをしていた。

海辺に車を止め、降りて身体を車体に預ける。タバコを吹かしながら乗車してくれそうな客を探すわけでもなく待つ。

あくびを数え両手の指で足りなくなる頃、嘆息を洩らしながら車の運転席へ戻る。

そして、いざ車を発進させようと思った矢先、バックミラー越しに後部座席へ座る一人の少女の姿が映る。

クリスはいつ入ってきたのか訝しげに思いながらも少女に話しかける。

「どちらまで？」

少女は淡々と答えた。

「世界の果てまで」

クリスは後部座席へ振り返り、そして正面へ向き直し、肩を竦め眉間に皺を寄せる。

「残念だったな、お嬢ちゃん。世界に果てがないってのは 500 年も昔にイタリア生まれのドンキホーテが証明してるんだ。さあ、とっとと降りろ」

クリスの冷たい言葉にも動じず少女は降りる素振りを見せない。業を煮やしたクリスは怒号をぶつけようと後部座席へ振り返る。

そこには開かれたアタッシュケースがあり、突き出されたソレにはクリスの人生が 10 回あっても稼げないような大金が入っていた。

少女は言う。

「どこまで行ける？」

クリスは剥き出しにしていた怒気を引っ込め、正面に向き直り淡々と答える。

「……世界の果てまでは無理だが、世界を 7 周程度は出来るだろうよ」

クリスはタバコに火を点け、キーを回し車を発進させる。

あてもなく走らせる車に運転も飽き、クリスは少女へ話しかける。

「お前、名前は？」

少女は答えない。

「家出か？その大金はどこから持ってきたんだ？」

少女は答えない。

クリスは苦虫を噛むような顔を浮かべ、しけもくのタバコに火を点ける。

ふとバックミラーに映る、少女の傍らにあるクマの人形が目に映る。クリスはこれだと思いまた話しかけた。

「そのクマの人形はお気に入りか？ それ、テディベアだろ。名前とかあるのか？」

少女はまたしても口を開かない。

クリスは諦め、タバコの火を消し、カーステレオに手を伸ばそうとした。その時、小さな声が後部座席から聞こえてきた。

「アンジェリカ」

クリスはカーステレオから手を離し、少女へ話しかける。

「……そうか、そのクマの人形の名前はアンジェリカか。いい名前じゃないか」

少女は静かに首を振る。

「違う。アンジェリカは私の名前。この子はジェシカ」

クリスは呆気にとられたように答える。

「そう、か。アンジェリカに、ジェシカか。わかった、もう覚えたぞ」

そこから会話は途切れ、またどこか居た堪れない空気が車内に立ち込め、それでも車はあてもなく進んでいく。

街を一周するころには陽も暮れ、あたりは街灯の光が目立つようになる。

クリスは行く場所を思いつき、そこへ車を走らせる。

たどり着いたのはクリスの顔なじみが経営する小さなレストランバーだ。

クリスはアンジェリカに話しかける。

「腹減っただろ？ 美味しいもんはねーけど値段は手頃でな。食いたいもん食べ。もちろんお前の金でだが」

アンジェリカはぶっきらぼうに「甲斐性のない男ね」と言い捨て車から降りる。クリスは肩を竦め溜息をつき、そしてアンジェリカとともにレストランバーの店内へと入る。

二人はカウンター席に座り、メニュー表を見る。そこへ店員の一人がカウンター越しに近づいてくる。

「　　ああ？　クリスじゃねーか。うちは金を持ってない客はお断りだ、さっさと帰んな」
シッ、シッと手を振り追い返そうとする店員にクリスは上機嫌に言葉を返す。

「なんだ？　ダニエル、お前が信仰する神様は隣人を愛せて言ったんじゃないか？
　　こりゃ今頃神様も泣いてるぜ」

店員は無愛想に答える。

「隣人ってのな、てめえみたいな恩を仇で返すような馬鹿野郎のことを言うんじゃない。文句があるなら今までのツケ返してから言いやがれ」

クリスはこれまた上機嫌で言葉を返す。

「いいぜ？　今までのツケを３倍でも４倍にでもして返してやるよ」

クリスはそう言いながらサムアップした手を右に向け、アンジェリカのほうへ指差す。

ダニエルは青ざめた顔で答える。

「まさか、お前……！　人さらいなんてやってるんじゃない！」

クリスも慌てて言葉を返す。

「馬鹿なこと言うんじゃないよ！　俺の客だ、客！」

ここでアンジェリカが口を開く。

「ダニエルさん、彼が言ってることは本当よ。この男が言うことなんて信じられないのは私でも理解できるけど、今回は本当よ」

「お前なあ！」クリスがアンジェリカへ反論しようとするところにダニエルが割って入る。

「お嬢ちゃん、良い洞察力だ。気に入ったぜ。もう少し大きくなったらまたうちに来な。
美味しいウィスキーをたらふく飲ませてやる」

大きく笑うダニエルを見てクリスは片手を額に当て嘆息をする。

メニュー表を見ながら食べるものを決め注文をする二人。

アンジェリカはメニュー表を見ながら眉間に皺を寄せた。

「……なにが美味しいの？」

「そりゃあ、我が国ご自慢のフィッシュアンドチップスかミートパイか。ダニエルに頼めばメイドの茹で釜スープも出てくるかもしれないぞ」

「出すかよ、んなもん。テメエは横でマーマイトでも舐めてろ。お嬢ちゃんにはパンとローストビーフ持ってきてやるよ。遠慮無く食っていきな」

そう言ってダニエルは厨房へと潜っていった。

残された二人はまた押し黙る。しかし、耐え切れなくなりクリスが口を開いた。

「お前、結局家出してきたのか」

「アンジェリカ、もしくはアンジェ」

「……アンジェリカ、お前は結局家出をしてきたのか」

少しの間を置いてアンジェリカは答える。

「そうね、その通りだわ。とても窮屈だったの、家にいるのがね。だから、飛び出したの」

アンジェリカは淡々と自分の身にあったことを語る。歌手として人気を馳せていた母は幼少の頃に死んだこと。本当の父は行方不明で義父に育てられていること。それ故に肩身が狭いこと。誰も、頼る人がいないこと。

それを黙って聞いていたクリスは、アンジェリカの話が終わると手をアンジェリカの頭の上へと乗せる。そして、優しく言葉を紡ぐ。

「行くか、世界の果てまで」

アンジェリカは恥ずかしそうに答える。

「世界に、果てなんかないんじゃないかったの」

「無いなら作ればいい。お前が果てだと思えばそこが世界の果てだ」

なにそれとアンジェリカが頭の上に乗せられたクリスの手を払いのけ、そっぽを向く。クリスは苦笑いをしてそれを眺めた。

そうして、もう一つ。クリスは疑問に思っていたことをアンジェリカに聞く。

「ところで、お前のその金。どこから」

その矢先だ。店の入口の扉が乱暴に開かれる。店に3人組の警官が入ってくる。

そこへ調度良く厨房から出来上がったばかりの料理を運んできたダニエルが、みるみると顔色を変え手に持つ料理の乗った皿を床に落とす。

「クリス……、やっぱりテメエ人さらいやってたのかッ!？」

ダニエルの怒号と共に、警官が叫び声を上げる。

「あの男を捕らえよ！」

アンジェリカが冷静にクリスへ話しかける。

「アナタ、人さらいだったの？」

クリスは立ち上がり厭味ったらしくアンジェリカに答える。

「ああ、どうやら、おかげさまでな」

クリスはアンジェリカの手を引き、入り口の立つ警官を無理矢理押しのけ車へ乗り込みキーを回す。フルスロットルで車を発進させる。

クリスはカーステレオのスイッチを入れ、タバコに火をつける。空気を読まない陽気なラジオのDJは、これまた場違いなロックンロールをクリスたちに届ける。

クリスの車を追尾弾のように複数のパトカーが追いかけてくる。そんな状況を見て、アンジェリカはまるで昔テレビで見たトムとジェリーのようなと思った。

クリスもなにか吹っ切れたのか笑い声を上げ叫ぶ。

「こちとらボルシェ博士が作った息子に乗ってんだぞクソツタレがっ！！ ターボもついてらぁ！ 追いつけるもんなら追いついてみろってんだ！」

アンジェリカもそんなクリスを見て自然と笑みがこぼれる。どこか、久しぶりに、心から楽しいと思えたのだ。

クリスのタクシーは果たして警官の追っ手をまき、街と街の境へまで逃げこむ。

一安心したクリスは車から降りタバコに火をつける。アンジェリカも車から降り、クリスのその姿を見て、「臭いからやめてよ、それ」とつぶやく。クリスはアンジェリカを睨むが、嘆息を一つつきタバコの火を消す。

クリスはこれからどうするかを考える。とんだ災難に巻き込まれ逃げて来た以上、もう後には退けないのだ。

クリスはふと、気づいたことを口にする。

「アンジェリカ、お前金はどうした。金の入ったアタッシュケースだ」

ここでアンジェリカは今までに見せたことのない反応で驚き、そしてバツの悪そうな顔をした。それから、申し訳なさそうに口を開く。

「あそこのお店に、全部置いてきちゃった……」

クリスはそれを聞き夜空を仰ぐように大きく両手を広げ、そして頭を抱えた。

クリスは車内へおずおずと戻る。運転席のシートを後ろに下げ眠るように倒れこむ。アンジェリカも少し間を置いて車内へ戻った。

アンジェリカは少し泣きそうな声でクリスに尋ねる。

「……怒ってるの？」

クリスは起き上がり目をつむったまま淡々と答える。

「別に。怒ってねーよ」

アンジェリカは「そう……」とぼつりつぶやき、そのまま押し黙る。

車内に静寂が立ち込め、アンジェリカに聞こえてくるのはクリスの寝息と外にいる虫虫の

鳴き声だけだ。アンジェリカは助手席で体育座りをし、小さく丸まる。

そこへ口を開いたのはクリスだった。アンジェリカは驚いて顔を上げる。クリスは突然お伽話のようなことを話した。

「昔、天使に会ったんだ。俺はまだ自分で右も左も決められないようなガキだった頃の話だ。俺の生まれは内戦地でな、その時ちょうど鉛球が頭を掠めて死ぬか生きるかの瀬戸際だった。死ぬってものがまだよく分からなくて、それでも痛くて苦しくて、多分涙を流してた。そこへ現れたんだ、その天使が」

話を聞きながらアンジェリカは口を挟む。

「それって、羽が生えて頭に輪っかをつけたような？」

クリスは「いや、意外と普通の風貌だった。ただ、そこには場違いな風貌だったよ」と答え、話を続ける。

「そいつが俺に言うんだ。『お前は選ばれた。生きたくはないか』ってな。ガキの俺にはそいつが何を言ってんのかさえも分かんなかった。ただ、この痛みを、苦しみを、どうにかしてくれる。それだけはなんとなく分かった。俺はとにかく頷いたよ。すると、その天使は“果物の実”を俺の口元に差し出してただ淡々と『食え』って言ったんだ。不思議な味だった、美味くはなかった。だが、その実を口にしたら途端みるみると傷が癒えていった。魔法のようだったよ」

クリスはふと気づいたようにアンジェリカへ「創世記は知ってるか？」と聞き、アンジェリカは「知らない」と答える。それを聞き、クリスは話を続ける。

「そして、その天使は『お前は選ばれ、選んだ。そして、また大きな罪を背負ったのだ。お前には試練が付き纏い、その全てを許さなければならない』、そんな事だけ言って俺の傍から消えた。光の粒になって消えていったんだ。俺は夢でも見たものだと思った。でも、後々思い知ることになった。試練も、その実が俺になにをもたらしたのかも」

クリスが話し終えてアンジェリカはどうにも腑に落ちない顔をする。クリスはそれを察し話をまとめる。

「ま、要はだな。俺に不幸話はいつも付き纏ってるんだよ。今更こんなことで凹んだり怒ったりもしない。だから、その、なんだ。さっきみたいな顔するなよ」

アンジェリカはクリスの意図を汲み取り、途端なんだか恥ずかしくなってそっぽを向く。

「なにそれ。そんな事を言うために周りくどい変な作り話なんてしちゃって」

クリスはそれを見て苦笑いをする。

しかし、アンジェリカは少し話の続きが気になってクリスに尋ねる。

「でも、その話。本当だとして、その天使は何のために」

そこでアンジェリカの話は途切れる。クリスも異変には気づいた。二人が乗るビートルは突然複数の光に照らされ、その姿があらわになる。気づかぬうちに複数のパトカーに包囲されていたのだ。

クリスが一人外へ出る。パトカーからも複数の警官が、その中に一人見慣れない中年風の

男も混ざって表に現れる。アンジェリカはその男の姿を見て、自分も車から降りポツリと呟いた。

「パパ……」

中年風の男はニヤリと笑い、口を開く。

「下衆が。うちの可愛い娘をさらってどうしようと思ったのだ。金か？ あの小汚い店に私の金が大量にあった。どうせ事前に娘をたぶらかして金を盗み出させたのだろう。愚かな男だ。実に、愚かだ。死んだ方がよほどまだ世のためになろう」

中年風の男が右手をゆっくりと上げる。それに促されるように警官たちが一斉に銃を抜き、クリスへ向ける。

アンジェリカは慌てるようにクリスの前に出て叫ぶ。

「パパッ！ この人は関係ないわ！ 私が、私が……一人で、お金を持ちだして、家を出たの……」

中年風の男は含みがあるように口を開く。

「それで、どうするつもりだ？」

アンジェリカは暗い顔をしながら頭を垂れて答える。

「ちゃんと、帰ります。パパの、言うことだもの……」

男は笑いながら言う。

「フハハハ！ そうだ、それでこそ私の娘だ！ お前は私の言うことだけを聞いていればいい。それがお前の幸せなのだ。さあ、おいで。帰ったらまたパパと“遊ぼう”。」

アンジェリカは怯えるように一瞬身体を身震いさせる。それを見たクリスはここで初めて口を開く。

「あー、アンジェリカのパパさんよ。話を聞く限り俺はもう関係ないんだろ？ あんた、相当の権力の持ち主みたいだな。頼むからその傍にいる警官どもの拳銃をおろすように言ってやってくれよ。それと、あんたの娘をここまで運んできた運賃だ。結構高くついてるぜ？」

クリスの要求に男はにこやかに答える。

「ああ、そうだなそうだな。悪かった、悪かった」

そう言ってまた右手を挙げる。

「撃て」

警官たちは男の命令のまま、クリスをその手に握る拳銃で撃ちぬいた。クリスは衝撃で後ろへと吹き飛び、そのまま地面へ倒れる。それをみたアンジェリカは声にもならない悲鳴を上げた。

中年風の男は淡々とつぶやく。

「ゴミは処理をしなくてはな。アンジェリカも分かっただろう。罪には罰を。世の習わしだ」

そして、クリスが喋り出す。

「俺には嫌いな人間がいる」

その場に居る全ての人間が驚き、その身を固く強張らせた。

クリスはゆっくりとその場で立ち上がり、話を続ける。

「最初から両手両足がついている、両目が見える、両耳が聞こえる。そんな当然のことさ。そんな“当然”を、さも“当然”のように押し付けてくる人間が俺は大嫌いだ。それが当然じゃない人間はどうしたら良い？ どう答えれば良い？ その“当然”を目の前にした俺たちは誰を恨んで、誰に願えばいいんだ」

男はたじろぎ、警官たちへ口早に命令する。

「撃て！ いいから撃ちまくれ！」

警官たちはもはや命令のためではなく、自身の防衛の為にクリスへ拳銃の引き金を引く。果たして、警官たちは弾の切れた拳銃を静かに下ろす。クリスはどんなに鉛球でその身を穿たれようと、もう倒れることは無かった。

クリスはゆっくりと中年風の男のほうへ歩き出す。中年風の男は化け物を見たかのような顔をして、後ずさりをする。

クリスは一瞬立ち止まり、細々とつぶやいた。

「お伽話ってな、意外と悲劇が多いんだぜ？」

クリスはまた中年風の男のほうへ歩き出す。男はいよいよ足の力が抜け、その場で尻餅をつく。そして、クリスに哀願するように言葉を繋ぐ。

「か、金か！？ それともその娘か！？ どちらでも、いや、どちらともでもくれてやる！
だから、だから、もうこの通りだ。許してくれ……！」

クリスはぼつりとつぶやく。

「許してくれ、か……」

クリスはくると反転して、中年風の男から離れ自分の車の方へと戻る。

それから、投げやりに男へと言い放つ。

「俺はアンタを許した。大体、別に許す許さないの話じゃないんだ。お互いの事情があった。それだけだ」

クリスは車の運転席へ入ると、ドアを閉め、代わりに窓ガラスを開いた。そして、アンジェリカに言う。

「後はアンジェリカ、お前の問題だ。お前が選べよ。別にお前のパパもお前に愛がないわけじゃないだろうさ。愛も様々さ。それとも、俺との約束を選ぶか。世界の果てに、連れて行ってやれるかの保証はねーけどな」

クリスは車のヘッドライトを点け、エンジンを吹かす。そして、タバコに火をつけた。

アンジェリカは少しの間逡巡した後、クリスへ言う。

「その臭いの。やめてくれればアナタについていくわ」

クリスは面喰らったようにぽかんと口を開き、それから肩を竦めて答える。

「そいつはちょうど良かった。これが最後の一本だ」

クリスは一口、大きくタバコの煙を吸い込み、そして溜息のように煙を吐く。それからそのタバコを窓から投げ捨てた。

アンジェリカは毅然とした態度でクリスの車の助手席へと乗り込む。クリスは運転席側の窓ガラスをゆっくりと閉め、ギアを入れアクセルを踏む。

車は発進し、アンジェリカの父親からどんどん離れていく。

アンジェリカは何も言わず、助手席側のサイドミラーでその父親の姿が見えなくなるまで見つめていた。

クリスは元いた街から遠く離れ、延々とあてもなく車を走らせていた。

しかし、ガリソンも無限に湧いてくるわけでもなく、ついに底を切らしてしまった。

クリスとアンジェリカは車から降り、車体を後ろから身体を預けるように力の限り押し、どうにか近くの街へと運ぶことにした。

アンジェリカは不満をこぼす。

「どうしてこうなるのよ！」

クリスは投げやりに言葉を返した。

「どうしてこうなったんだろうな……」

アンジェリカは辟易するかのように言う。

「もう捨ててしましましょうよ、こんなオンボロ」

クリスは声を荒立てて答えた。

「馬鹿言うな！ こいつは俺の大切な大切な相棒なんだ！」

クリスは続けてアンジェリカに言う。

「大体、こいつは俺の商売道具だ。その商売も助手席にどこぞの”小さなレディ”が乗ってるんじゃ出来やしねえ。子連れのタクシー運転手なんて聞いたことがあるかよ」

それを聞きアンジェリカは口籠らせてつぶやく。

「そんなこと言ったって、しょうがないじゃない……」

クリスはそんなアンジェリカを見て溜息をつき、「俺が悪かった。今のは忘れろ」とアンジェリカに謝った。

それから二人は黙り込む。黙々と車を押し続ける。しかし、それに耐えかねたのかアンジェリカが口を開く。

「ねえ、聞きたいことがあるのだけども」

クリスは生返事で「なんだ」と答える。

「アナタ、不死身なの？」

クリスはその問いにしばらく答えなかった。アンジェリカは「別に言いたくなかったら、いいの」と話を打ち切ろうとする。

クリスは逡巡した後、口を開く。

「あの“お伽話”の通りだ。俺は天使に命を救われ、永遠の命を手に入れた」

アンジェリカは言う。

「じゃあ、クリスはこの世界で最強ってこと？」

クリスは力なく笑う。

「そうでもないさ。飯を食わなきゃ腹は減るし、疲れれば自然とまぶたが重くなる。身体が傷つけば痛いし、俺だってアンニュイな気持ちになることだってある。そんなモノ最強だとは言えないと思うよ。ただ、死ななくて、そうだな、怪我の治りが他の人間より少し早い。それだけさ」

「それに」とクリスは話を続けようとして、「いや、なんでもない」と話を打ち切る。しかし、アンジェリカはまだ話を続ける。

「ねえ、その天使の目的はなんだったの？ クリスを死なない身体にして、なにがしたかったのかしら」

クリスは答えようか迷った。だが、迷った挙句、重々しく口を開く。

「……あの後、一度だけその天使にまた会うことがあった。奴は俺にこういったよ。『お前は神になる男なのだ』ってな」

それを聞いてすぐにアンジェリカは吹き出した。腹を抱えて笑い声をあげる。クリスはその姿を見て、言ったことを後悔するかのように右手で頭をぼりぼりと掻き、大きな溜息をつく。

「ふ、ふふっ、クリスが、クリスが神様だなんてっ！ おかしいったらありゃしないわ！ ふふ、フハハハ！」

「うるせえ！ ホントに言われたんだからホントのことなんだ！ クソツタレ、この話はもう終わりだっ！」

アンジェリカはしばらく笑い続けた。

それからは互いに話すこともなく、ただただ見知らぬ道を沿って車を押し続ける。それは陽が登り切った頃から陽が暮れようとする頃まで変わらなかった。

クリスが「これはもう車の中でとりあえずは野宿だな」と心の中で思い始めた頃だった。遠くに街のヒカリが見えたのだ。

クリスは疲れきったアンジェリカに興奮しながら激励を飛ばす。

「おい！ 街が見えてきたぞ！ 街の光だ！ もうちょっとで美味しいもんも食えるだろうよ！ ほら、頑張れ！」

アンジェリカは「ふえ・・・？」と力ない声を漏らし、それから一間を置き、目を輝かせた。

日が沈みきった頃、ようやく街の全貌がはっきりとわかる距離まで近づいた。

クリスはアンジェリカへ「少し車の中で休んで待ってろ。街のやつに車を運ぶのを手伝ってくれないか頼んでくる」と言い残し、走って街の方へと向かう。

ほどなくして、クリスは一人の街人と一つのレッカー車を連れて車の元へ戻ってきた。

クリスのビートルはレッカー車に繋がれ、ゆっくりと、しかし人が後ろから押し運ぶスピードとは比べ物にならない速度で、街まで運ばれていく。

クリスとアンジェリカはレッカー車の助手席に座らせてもらい、街まで運ばれていく。街に着いた二人は、レッカー車を運転してここまで自分たちを運んでくれた運転手の街人に感謝をする。

「ありがとう、助かったよ。じゃあ、その車持って行ってくれ。金はさっき話してくれたレストランに持ってきてくれればいいよ。そこで待ってる」

アンジェリカはその会話を聞き、不思議に思ってクリスに聞く。

「ガソリンを入れてもらうのよね？ お金を貰うんじゃないで、お金を払うほうじゃないの？ 私たち」

その質問にクリスは淡々と答える。

「売るんだよ、あの車。大体俺たちのどこに払う金があるってんだ」

アンジェリカは驚き、クリスに言う。

「売っちゃうの！？ 相棒で、商売道具じゃなかったの！？」

クリスはその言葉を聞いて、しゃがみ込み頭を抱える。

「俺だって、俺だってなあ……売りたいかねえよ。クソう、くそう……」

クリスは未練たらしく、少し涙声だった。

アンジェリカはどこか申し訳無さと慈悲の心が芽生え、自分もしゃがみ込みクリスの背中へ慰めの意味を込めて片手を添えた。

しかし、クリスはすぐに立ち上がり毅然とした態度で拳を握る。

「いつまでも落ち込んでもらねえ。売っちゃったんなら、また買やいいんだ。よし、レストラン行くぞ、レストラン」

クリスは足早に歩き出す。アンジェリカはその背中を見つめ、少し笑ってから、後をついていく。

レストランに着いた二人は各々食べたいものを注文する。元いた街から離れ3日も経っていた。それまで二人はろくな物を食べていなかったのだ。そんな二人はまさにここは天国だった。

注文した料理を瞬く間に腹の中へ入れ、そろそろデザートかと言うころに、先ほど別れた例の街人が現れた。

クリスはレストランの入り口に立つその街人に手を振り、自分たちの座るテーブルへと招く。

街人はクリスの横へ座り、「このレストランは気に入って貰えたかい？」と気軽に挨拶をする。クリスは陽気に「ああ、最高だね。三食ここでも良い」と答える。

そして、急ぐようにクリスは街人へ尋ねる。

「それで、いくらになったんだ。俺の”元”相棒は」

街人は袋に入ったお金をクリスに手渡す。そして、少し申し訳なさそうに言う。

「まあ、正直に言うと、もうあの車は”側”だけだ。むしろ、びっくりしたよ。あんな純正でもないパーツをよりあわせて今まで動いていたんだろう？ 君は良いメカニックになれば

るかもしれない」

クリスはその言葉を聞きながら悲しそうな目で金の入った袋を見つめる。そして、諦めたかのように小さくつぶやいた。

「ああ、ありがとう。メカニックか、考えてみるよ……」

街人は「じゃあ、僕はこれで。また車を買うような事があれば僕のところに来ればいいよ。安くしとく」とだけ言い残し、店を去った。

アンジェリカはデザートジェラートを頬張りながらクリスに聞く。

「いくらぐらいになったの？」

クリスは放心状態で店の天井を見つめながら答えた。

「お前が今頬張ってるジェラートをすぐにでもキャンセルしてスーパーに売ってるアイスキャンデーでも与えとけば良かったなって思えるくらいの値段さ」

アンジェリカは答える。

「そう……。でも、このジェラートとっても美味しいわ」

クリスも放心状態のまま答える。

「そうか、良かったな……」

クリスたちは食事を終わらせ会計を済ませることにした。クリスはここでも阿鼻叫喚するのだった。

「クソツツレ、料理がこんなに高いだなんて聞いてねーぞ！！」

アンジェリカはそんなクリスを尻目に、「またここに来れたらいいな・・・」と心のなかで思った。

クリスたちは店を出て、すぐに宿を探した。最初に見つけた宿がとても手頃な値段で（しかし、あまりにも酷い体裁の宿ではある）クリスは即決した。

宿主の招待された部屋はボロボロで、風が吹くと悲鳴を上げる窓と、ベッドとソファがひとつずつあり、後はアンティークとは聞こえが良い棚に年代物のブラウン管テレビが置いてあるだけの質素な室内だった。

宿主が店のカウンターへと帰るとクリスはすぐにソファへ倒れこむ。

アンジェリカはクリスに聞く。

「ねえ、お風呂は？」

クリスはめんどくさそうに答える。

「考えるな。寝ろ」

アンジェリカは諦めて言われたとおりにすることにした。着ていた服を脱ぎ、下着姿でベッドに潜り込む。

少し時間が経ち、アンジェリカは「もう寝た？」とクリスに問いかける。返事はない。

アンジェリカは少し考えたのち、独り言のように語りだす。

「あのね。私、後悔はしてないの。あなたとこうやって街を飛び出したことに。このたった数日のことよ。それでも、変わったの。何もかもが。すごく嬉しいの。すごく、楽しい

の。確かに大変なこともいっぱいあったわ。このたった数日のことで。でも、その“たった数日のこと”が私にはどれも新鮮で、輝いてて。だって知らなかったわ。車で眠ると背中が痛くて悪い夢を見ることだとか、ずっとシャワーを浴びないとこんなにも身体がベタベタになって落ち着かないことだとか、“アナタ”のような人がいることだとか。でも、生きてるって気がするの。この世界は私の知らないことでいっぱい溢れているの。それを感じられている今が、とても幸せよ」

アンジェリカはひと通り話し終わると満足したように「おやすみ、クリス」と優しくつぶやき、それから静かに寝息を立てた。

少し間を置いてクリスは小さく鼻で溜息をつき、身体を丸めるようにして、それから眠りについた。

翌日の朝。クリスはアンジェリカへ出かけると告げてホテルを出ようとする。

アンジェリカは「どこへ行くの?」と尋ねた。クリスは「仕事探したよ、仕事探し。しばらくはこの街に居ることになるだろうさ」と言葉を返した。

クリスが出て行った後、アンジェリカはホテルの部屋でぼーっとテレビを眺めていた。しかし、それにも飽きて自分も出かけることにした。

部屋から出るとアンジェリカはカウンターにいる宿主へ挨拶をし、それからホテルからも出て鼻歌交じりにあてもなく街をうろつく。

そんな中、アンジェリカは街角にある小さな喫茶店を見つける。

その喫茶店を目にしたアンジェリカは、一つの決心を抱いた。

その日の晩。アンジェリカとクリスはホテルに戻り、お互いにベッドへ腰をかけてぼんやりとテレビを見ていた。

ふと、アンジェリカはクリスへ話しかける。

「お仕事は、見つかったの」

クリスは無言でその返事のかえした。

その反応を見たアンジェリカは淡々と言う。

「そう……私はお仕事見つかったわよ」

その瞬間、クリスは驚きのあまり叫びを上げる。

[illegible]

アンジェリカはしてやったりと、勝ち誇ったかのようにニヤリと笑い、ベッドの上へと立ち上がり胸を張る。

「今日ね、一人で街をうろついてたら隅の方に小さな喫茶店を見つけたのよ。そこで、閃いちゃったの。店に入って店主のおばさんに直談判してみるとすんなり OK 貰っちゃった。どう？ クリスも頼んでみたら？」

クリスは悔しさを隠せない様子で強がり言う。

「は、はッ！ 喫茶店だと？ バカバカしい！ 『いらっしやいませ、お客様？ 本日も大変お日柄が良く、……本日のオススメ？ 自分で食うものも決められねーのかこのスツ

トコドッコイ』　こうなるのが目に見えるぜ。いいか？　俺は漢の中の漢だ。孤高で、クールな、ダンディだ。他人へ謙るような仕事なんて出来るかよ。だからこそタクシー運転手をやってたんだ。俺みたいな孤高で、クールな、ダンディにはピッタリの仕事さ」

アンジェリカはそれを聞き、呆れ顔で言う。

「その孤高でクールなダンディさんは“相棒”を売っぱらっちゃってタクシー運転手を廃業したのではなくて？」

クリスは一瞬虚を突かれたように黙り、そして答える。

「廃業は、してないさ。一時休業だ。相棒は……、そう、俺は孤高でクールで“ダーティ”なんだ。自分の生活の為に長年寄り添った相棒だって売りに出す。だが、俺はいつか相棒を迎えに行く。必ずな！」

アンジェリカは心底どうでも良さそうに「あら、そう」と答え、ベッドへ座り直しブラウン管を眺める作業に戻った。

そんなアンジェリカを見てクリスは溜息をひとつつき、同じようにベッドへ座り直しブラウン管テレビを眺めるのであった。

翌日。アンジェリカは例の喫茶店に来ていた。クリスを連れて。

クリスはアンジェリカへ文句を垂れる。

「どうして俺がついてこにゃいかんのだ」

「そりゃあ、挨拶は必要でしょ？　“お父さん”」

クリスはわけが分からず「はい？」と素っ頓狂な声を上げる。

そこに、店主の女性が二人に近づいてきた。

「アンタがアンジェリカの“父親”かい。話に聞いた通りうだつが上がらないような見た目だねえ」

「なんだと！？」と噛み付こうとするクリスの背中をアンジェリカが思い切りはたく。

アンジェリカは取り繕うように店主の女性へ話しかける。

「ええ、全くその通りですわ、ナオミさん。このこのどうしようもないボンコツが私の父親です」

また反論しようとするクリスにアンジェリカは睨みをきかして黙らせる。そして、アンジェリカは店主のナオミへと自己紹介をしりと促す。

クリスはしぶしぶ自己紹介を始めた。

「あー、その、私アンジェリカのパパをやってるクリストファーです。愛称を込めてクリスとお呼びください。いやあ、こんな“ちんちんくりん”がお店のお役に　痛っ、叩くな！　分かった！　分かったから！　あ、いや、だから、うちの可愛い娘がですねハハハ、こんな素晴らしいお店で雇っていただけるだなんて光栄に思います、ええ」

引きつった笑みを浮かべながら自己紹介の終わったクリスを見て、店主のナオミは肩を竦める。

「……そりゃ、こんな男だと女にも逃げられるわけよ。奥さんに逃げられて、職も失い、

夜逃げ同然で元いた街から飛び出して来たんだって？ 親を選べないのはツライわね、アンジェリカ。まったく、しっかりしなさいよ、“クリス”」

クリスはそれを聞き「アンジェリカ、お前！ なにを」と言いかけて、アンジェリカから踵で足を踏まれ、黙ることを余儀なくされる。

アンジェリカは出来るだけの満面の笑みを作り、ナオミに言う。

「こんな父親ですが、その、悪い人間ではないのです。そして、こんな父親の助けに少しでもなりたいたったんです。ナオミさん、きっとご迷惑をおかけするとは思いますが、私一生懸命働きます。どうか、よろしくお願いします」

それを聞きナオミはアンジェリカを抱き締める。そして、優しく言葉をかけた。

「ええ、任せなさい。困ったときはお互い様よ。私はアナタを家族のように歓迎するわ。ま、しょうがないからそのボンクラもね」

クリスはもう反論する気にもなれず、ただ嘆息した。

ナオミが「それで？」と切り出す。

「アンタはどうするの？ クリス」

突然とんできた質問にクリスは慌てるが、その意味を汲んで答える。

「俺は……見ての通り、不器用な男だ。喫茶店だなんて務まらねーよ。直ぐにでも他のアテを見つけるさ。だから、……アンジェリカを頼む」

ナオミは頬をほころばせ「勿論だとも」と答える。クリスは恥ずかしそうにそっぽを向いた。

ナオミは抱き締めるアンジェリカをそっと離して、「さて」と手を腰に当てる。

「じゃあ、アンタたちの歓迎祝いだ。この店の屋根裏部屋をアンタ達にあげるよ。ホテル暮らしをしているんだろう？ そんなんじゃいつか金が尽きちまうよ」

クリスが驚いたように声を上げる。

「おいおい、いいのか？ 俺たち初対面みたいなもんだぜ？ 信用してもらえるのは嬉しいが、ホントに？」

ナオミはやれやれと両手を上げ肩を竦める。

「馬鹿かい、アンタ。あたしゃ言ったはずだよ。『家族のように歓迎する』ってね。まあ、その代わりひとつ条件がある」

クリスは息を呑み、その条件を聞く。

「条件って、なんだ」

ナオミは少しの間をあげ、ニヤリと笑いながら言った。

「次にこの店へ来る時はただいまって言いな」

ナオミはガハハと笑い、クリスは拍子抜けしたように肩を竦めた。

その翌日から、アンジェリカはナオミの喫茶店でホールの店員として働くことになった。

クリスは足繁く様々な働けそうな店を回り、一蹴される日々を送る。

それでも、クリスはアンジェリカに負けじと、半ば子供染みた悔しさも覚えつつ、日雇いの土木業などで金を稼ぐ。

仕事を終えるとナオミの喫茶店へ戻り、借りた屋根裏部屋でアンジェリカと一日の出来事を話したりする。

アンジェリカは楽しそうに話す。

「今日はね、ナオミの娘さんと一緒にお仕事をしたのよ！ ルツちゃんって言う子なの。私より2つ年下らしいけれども、とっても賢くってとっても可愛い。それでね、お友達になったの！ 私、恥ずかしいけれども友達だなんて初めて出来たわ。とても、とても嬉しいの」

クリスはこいつもまだまだ子供なんだと心中で苦笑いしつつも、アンジェリカの頭を優しく撫でてやる。

「そうか、良かったな。お前ならそのうちいっぱい友達が出来るさ。この先、きっとツライこともあるだろうが楽しいこともいっぱいある。ワクワクしてきたろ？」

アンジェリカは笑顔で答える。

「ええ、とっても！ 私、やっぱりクリスに感謝しないとイケないわ！ こんなにも外が楽しいことに満ち満ちているだなんて！」

クリスは少し恥ずかしそうに、苦笑いしながら答える。

「明日もきっといい日になる。もう夜も遅い、そろそろ寝るんだ」

クリスに言われた通り、アンジェリカはベッドに潜り込み目を瞑る。そして、小さくつぶやいた。

「ありがとう、クリス。おやすみなさい」

クリスはひとつ溜息をつき、「おやすみ」と優しく言葉を返した。

クリスたちがこの街に来て、一週間が経とうとしていた。

クリスは相も変わらず仕事が見つからず途方に暮れていた。

そんなクリスは街の海岸線にある埠頭でぼーっと、勿論アンジェリカには秘密で、タバコを吸っていた。

そこに一人の来客が現れる。クリスはその来客に見向きもせず、言葉を投げかける。

「タバコ、一本いるか？」

その来客は厳かに、淡々と答える。

「それは墮落した者が啜るモノだ」

「そうかい」とクリスもまた淡々と答え、ぼーっとタバコを吸いながら海を眺める。

タバコの火種がフィルターまで差し掛かる頃、クリスはその来客に話かける。

「久しぶりだな。なんの用だ、“天使”さんよ」

クリスに天使と呼ばれた男は答える。

「神からの預言を貴様に与えに来たのだ」

クリスはタバコを地面に押しつけるようにもみ消し、はじめて天使のほうへと向く。

「今度は俺をどうするつもりだ？ イシュマエルの称号でもくれるのか？」

天使はクリスの言葉を気にも留めず、言葉を紡ぐ。

「貴様には常に試練が付き纏う。それは抗えない運命で、最初から決まっている。貴様は全てを許す存在へと昇華しなくてはならない。……娘だと、気づいているのだろう？」

その言葉にクリスは目を見開き、そしてうなだれた。

「やっぱり、そうなのかよ。だろうと思ったぜ。いや、信じたくは無かった。……サラは、死んだのか」

「ああ、アンジェリカの母親のサラは他界した。あの子は一人だ」

クリスは即答した。

「アンジェリカには、俺がいる。一人じゃない」

天使もそれに即答した。

「いずれ一人になる。それは貴様とて同じことだ」

クリスは黙りこむ。しかし、クリスは突然立ち上がり、持っているタバコの箱を海に投げ捨て哀願するように天使へ訴える。

「頼む！ この通りだ！ アンジェリカだけは巻きこまないでくれ！ どんな試練だって俺は受け止めてみせる！ お前の主に言われりゃこの場で狂人の振りだってしてみせる！

だから、だから、お願いだ。アンジェリカを、巻きこまないでくれ……」

天使は淡々と答える。

「それは、我が主が決めることだ。貴様が決めることでもなく、私が決めることでもない」
クリスは膝から崩れ落ちるようにして地面へと座り込む。

天使は言う。

「近いうちに貴様へと試練が与えられる。身の振り方を決めるのだな」

クリスはなにも喋らない。それを見た天使はクリスに背を向け、その場から光の粒となり消え去ろうとする。

そこへ、クリスは最後に言葉を投げかけた。

「お前、俺のこと嫌いだろ？」

天使はクリスの方を見ず、答える。

「ああ、大嫌いだ」

天使はそのまま消え去った。

その日の夜。屋根裏部屋でクリスとアンジェリカは他愛のない話をしていた。

アンジェリカはルツと口喧嘩をしたこと。明日にはそれを謝りたいこと。どんな風に謝ればいいのか悩んでいること。そんな話だった。

クリスはそれを黙って聞いていた。そして、時々笑って励まし、アドバイスをしてやり続けた。

アンジェリカはどこか安心したようで、ベッドへ潜り込もうとする。

そこへクリスが話しかけた。

「おっと、アンジェリカ。……その、なんだ、寝る前にひとつ話がある」

アンジェリカは不思議そうに聞き返す？

「なに？ クリスも誰かと喧嘩でもしちゃったの？」

「いや、そうじゃないんだ」とクリスは答え、クリスのベッドの下から少し大きな紙袋を取り出す。

「これ、やるよ」

そう言ってその紙袋をアンジェリカに放り投げる。

アンジェリカは訝しく思いながら紙袋の中身を確認する。中身を確認した瞬間、「わっ！」と歓喜の声を漏らす。

「どうしたの、これ？ 大きなティディベア！」

クリスは少し恥ずかしそうに話す。

「プレゼントだよ。お前が前持ってたティディベア ジェシカの代わりだ。ダニエルの店に置いていったきりだろ？ 大切にしろよ」

アンジェリカはクリスに聞く。

「でも、どうして急に？」

クリスは言い淀む。しかし、直ぐにその場にじっくりくる言葉を見つけた。

「アンジェリカは最近頑張ってるからな。ご褒美があってもおかしくはないだろう？ 神様だって笑顔で許してくれるさ」

アンジェリカは貰ったティディベアを両手で宙に掲げ、見つめ合いながら言う。

「そうね……そうよね！ ご褒美ぐらいあっても確におかしくはないわ！」

アンジェリカはティディベアを抱きしめながら言う。

「クリス、ありがとう。本当に、本当に」

クリスはアンジェリカの異変に気づき、慌てふためく。

「お、おい！？ どうした？ なんで泣くんだよ！？」

アンジェリカも戸惑うように涙声で答える。

「ど、どうしてかしら……ひっく、でも、わからないわ……涙が、涙がねっ、出るの……多分、とても、嬉しいのっ……とても、とってもっ……」

クリスは優しくアンジェリカの頭を撫でた。

「そうか。良かったよ、喜んでもらえて。でも、泣き虫なのは関心しないな。ほら、笑って」

クリスは撫でる手をアンジェリカの頭からそっと離す。

アンジェリカは両手で涙を拭い、なんだかよくわからないグシャグシャな笑顔をクリスに向けて答えた。

「うんっ！」

翌日のまだ日が昇りきらない早朝。クリスはアンジェリカを起こさないようにこっそりと屋根裏部屋から出る。

クリスが下へ降りると間の悪いことにナオミと鉢合わせてしまう。

ナオミがクリスに聞く。

「おや、こんな朝早くからどこへ出かけるんだい」

クリスは適当にその場で思いついた言い訳で取り繕う。

「えーと、そう、アレだ。仕事探した。漁師も悪く無いと思ってな。今から直談判さ」

ナオミは不審に思いクリスを問い詰める。

「漁師ねえ。あまりアンタの柄じゃない気もするけど？」

クリスは必死に言い訳をする。

「いや、俺もだな、そう思う。だが、しかし、そうも言ってもらえないだろう？ 仕事を選んでる場合じゃないんだ」

すかさずナオミも言い返す。

「なら、うちの店で働けばいい。みっちりこき使ってあげるよ。それに、そのほうがアンジェリカも安心するだろう？」

クリスは言い淀んだ。しかし、諦めたかのように話はじめる。

「……大切な用があるんだ。それはもう、大切な、一大事だ」

ナオミはなおもクリスを糾弾する。

「アンジェリカ以上にかい？」

クリスは即答する。

「それは違う！ 違うんだ……。アンジェリカは大切だ。それは何よりも。でも、いや、だからこそ、行かなければならないんだ」

ナオミはしばらくにも言わなかった。しかし、どこか遠くを見るような目でクリスに語りかける。

「私の夫はね、立派な軍人だったよ。国のために使命を全うした。それは今なお私の誇りだよ。だがね、最後に見た戦場へ赴く彼の背中がね、今のアンタととても似ているよ。それでも、アンタは行くのかい？」

クリスは顔を伏せ、しかし店の出入口のドアの戸に手をかける。

「……アンジェリカを頼む」

ナオミは吐き捨てるように答える。

「アンジェリカはきちんと面倒を見るよ。でも、アンタの頼みだからじゃない。アンタの頼みなんて聞いてやるもんか」

クリスは戸を開け、小さくつぶやいた。

「それでいいさ。頼んだ」

クリスは店から出て、朝もやのかかる街の中へと消えていった。

クリスはあてもなく歩く。既に街を出てから半日は過ぎていた。陽ももう少しばかりで暮れ出す頃合いだ。

クリスは突然、気力が尽き果てたようその場に仰向けになって倒れこむ。

「腹、減ったな……」

クリスはナオミが作ってくれたビーフシチューを思い出す。蜘蛛が巣を張り、雨漏りもするが、それでも居心地よかった屋根裏部屋を思い出す。そして、最後にアンジェリカの顔を思い出す。既に気が滅入りそうになっていた。片腕で顔を覆い隠し、少しばかりここで寝て一瞬でも全てを忘れ去ろうと思っていた。

そんなクリスに、声をかける者がいた。

「……こんなところで何してるのよ、クリス」

クリスはその声に驚きその場で上半身を飛び起こした。そして、その人物を見てア然と口を開ける。

「アンジェリカ、お前なんでこんなところにいるんだ……」

アンジェリカは手を腰に当て、少し怒った口調でその質問に答える。

「朝起きたらいらないんだもの。ナオミさんに聞いたわ。ホント、勝手なんだから」

クリスは心の中であの女郎のビーフシチューを少しでも恋しく思った自分を呪い、深く溜息をついた。

そんな中、クリスはアンジェリカを見てひとつの異変に気づく。

「どうしてた、その膝。血が出てるじゃないか」

指摘されアンジェリカは少し恥ずかしそうに答える。

「……クリスを探しまわってたらずんじゃったの。そこら中を走り回って探したんだから」

クリスはなんだかバツが悪くなり、「すまん……」とだけ答える。

「それで？」とアンジェリカは話を切り出した。

「どうして急にいなくなったりしたの？ 私、クリスになにか酷いことでもしたかしら？」

クリスは言い淀むように「いや、そんなことはない」と答える。そして、必死に言い訳を考えた。

「俺は　しょうもない人間だ。お前の傍にいてもきっと良くないことにしかならない。だから、離れた」

アンジェリカは呆れたように言葉を返す。

「意外に殊勝なのね。それに、とても臆病だわ。アナタが小さく見てるのは自分？　それとも私かしら？」

クリスは少し怒気を含めて言い返す。

「違う！　そんな風にお前を見たことはない。ただ……そうしなければいけなかった。分かってくれ、アンジェリカ」

それを聞いてアンジェリカはなにも言わず、クリスの横へとそっと座る。少し風を肌で感じながら空を見つめる。それから、クリスのほうを見て話はじめる。

「クリス、私はね。アナタのことがとても好きよ。それがどんな好きなのかは、私にもわからないけれど。でも、クリスは私に世界を教えてくれた。小さな檻から私を連れ出して

くれた。とても感謝している、アナタをとて敬愛しているわ。だからこそ、一緒にいたいと思えるの。それでも、ダメなの？」

その問いにクリスは真剣に答える。

「ああ、それでもダメだ。俺はアンジェリカのそばにはいられない」

アンジェリカは立ち上がり痙攣を起こしたように言葉をまくし立てる。

「どうしてなの！？　ねえ、どうして！？　クリスは私のことを嫌いになっちゃったの……？　ねえ、お願いだから理由だけでも教えてよ……。私は、私は……アナタのそばにいたいわ」

クリスはそれでも答えない。押し黙るだけだった。

そんなクリスを見てアンジェリカは一筋の涙を溢す。そして、クリスに背を向けゆっくりとその場を去ろうとした。

その時、クリスが口を開いた。

「アンジェリカ。お前はサラのことを、ママのことを覚えてるか？」

アンジェリカはゆっくりと振り返る。

「ママのことを、知っているの……？」

クリスは暮れる陽を傍目で感じながら、ゆっくりと語り出す。

「　　サラと俺は生まれが一緒でな。同じ内戦地で育った。あんな環境でもサラと一緒にいる時だけは何もかもを忘れて楽しむことが出来た。よく俺に歌を聴かせてくれたよ。綺麗で、どこまでも澄み渡るような歌声だった」

アンジェリカはクリスの横へ戻り、座り込む。黙ってクリスの話を聞いた。

「俺たちが16になる頃だったかな。サラの歌声は、その頃うちの村に来ていた行商人に買われてな。半ば強引に村からサラは連れ出されたよ。それでも村の奴らは喜んでサラを送り出した。それを誇りだとも思っていた。だが、俺は引き止めることも出来ない自分の無力さが悔しくて仕方がなかったよ。だから、アレは覚えてる。18の誕生日だ。俺は一人で村を出た。サラの居場所なんて知りもしなかったし、その時まで村から一歩たりとも出たことの無かった俺には外の世界が巨大な魔境のようにも感じられた。それでも、必死に探したんだ」

「そして、ついに見つけたの？」

アンジェリカは夢中になってクリスの方へ身を乗り出す。クリスは少し苦笑いをして話を続ける。

「ああ、見つけたよ。半ばもう諦めかけてた頃にな。俺はストリートを夢遊病者のようにフラフラと歩いてたんだ。その時、不意にサラの歌声が聞こえた気がした。そして、それは気のせいじゃなかった。　　今思えば、なんで気づかなかったんだろうな。サラは歌声を買われて村を出て行ったんだ。それなら、クラブや音楽ホールを回って聞き込みをすればきっともっと早くサラへたどり着くことが出来たと思う。つまり、そういうところでサラを見つけた。サラは本当に歌っていたんだ。サラが歌い終わって、ステージから降りる

と同時に俺はサラの元へすぐに走って向かった。サラはとんでもなく驚いてたよ。それでも、俺たちはすぐに抱き合った。本当に、嬉しかったんだ。また会えたことが」
クリスは思い出を反芻するように、遠くを見つめる。そして、一つの決心を固め、また話を始める。

「それから、俺はサラが借りているアパートの一室で、サラと寝食を共にした。楽しい思い出だ。サラのショッピングに付き合ったり、サラ行きつけのレストランへ一緒に行ってみたり。あの時はレストランのマナーなんて知らない俺が大恥をかいたな。お互い恋しくなって、村の思い出話なんかもしたりした。永遠にこの時間が続けばいいと思ってた。それでも、そんな時間が続いたのはたかだか数週間だけだった。

サラの引っ越しが決まったんだ。俺はその時知りもしなかったが、サラは歌手として十分なほどの評価を得ていた。それで、大都市へ移り住み、彼女はもっと大きなステージへ立ち上ろうとしていた。勿論、俺も付いていこうとした。だが、俺は再会してしまったんだ。あの“天使”に。奴は俺に言った。『お前は女を不幸へと陥れるだろう』ってな。ついに、俺はその預言めいた言葉の恐怖から逃れられることが出来なかった。だから、俺はサラから離れることにした。そして、サラと別れる最後の日に、俺はサラと交わった。そして、その結果として生まれたのが アンジェリカ、お前だ」

アンジェリカは目を見開き、しばらくの間なにも喋らなかった。しかし、少しずつ、独り言のように言葉を漏らす。

「嘘よ……。だって、そんな、そんなこと……。そんなこと……。っ！」

クリスは淡々と答える。

「本当のことだ。俺が、お前の父親だ」

アンジェリカは咄嗟に立ち上がった。混乱を抑えきれぬままに激昂し、クリスに尋ねる。

「クリスが言うことには根拠がないわ！ クリスが私のお父さんだなんて、どうして言い切れるの！？」

クリスもその場で立ち上がり、既に星が眩きはじめた空を見つめながら答える。

「ジェシカ。お前が持ってたテディベアの人形だ。アレはな、俺がガキの頃にサラへプレゼントしたものだ。名前も俺がつけた。いつかダニエルのところへあの人形を取り戻しに行くことがあれば、調べるといい。あの人形にはポケットがついてて、その中に俺のラブレターが入ってる。サラはどうやら最後まで気づくことがなかったんだらうな。ちゃんとした返事を貰った覚えがないからな。そして、お前の名前だ、アンジェリカ。お前の名は母親のサラから貰ったものだろう。サラが昔からジェシカを抱いて良く言ってたよ。『この子がジェシカなら私が子供を産んだらアンジェリカね』ってな。ジェシカが“天から給うモノ”で、アンジェリカが“天使の子”だ。極めつけには本物の“天使”からアンジェリカがお前の子だなんて言われちまってよ。……。運命ってのは、よく出来てるみたいだ」

クリスは厭世の色を含んだ苦笑いを頬その顔に浮かべる。

クリスの話を聞き、アンジェリカはクリスにまた同じことを聞く。

「本当に、パパなの……？」

アンジェリカは顔を落とし、唇を噛みしめる。クリスもまた先ほどと同じ答えを返す。

「ああ、アンジェリカ。俺がお前の、本当の父親だ」

アンジェリカはクリスの元へ駆け出す。そして、クリスの胸に飛び込み、顔を埋める。それから小さな嗚咽を交え、クリスに訴える。

「どうして、今まで……っ、黙ってたの……！ ひっく、どうしてなの……！」

クリスはアンジェリカの頭を静かに撫でる。

「俺も、昨日まで知らなかったんだ。いや、それも嘘かな。なんとなく、そんな気はしてた。それでも確信は持てなかったんだ。悪かった」

アンジェリカは顔を上げ、クリスに言う。

「そうよ、全部アナタが悪いのよ……。私は、私は一体どうすればいいの？」

少しおどけてみせたアンジェリカは、涙をこぼしながらクリスへ問う。

「必ず迎えにくる。全てが終われば、必ず。約束だ。だから、今は」

アンジェリカはクリスから一步離れて、また顔を伏せる。

「一緒には、行けないのね……。それは、どうしてなの？」

「天使が俺に預言を残していった。お前を巻き込むことになるものだ。それだけは何としても避けたい。これはアンジェリカの父親としての願いであり、お前が知るクリスとしての願いでもある。分かって欲しい」

アンジェリカは黙りこむ。クリスもこれ以上の言葉が出てこなかった。

幾ばくかの時間が流れ、やっとアンジェリカが口を開いた。

「待ってる。私はクリスを待たわ、いつまでも。だから、約束よ。必ず帰ってきて。じゃないと……。私、寂しくてきっと死んじゃうわ」

にこりと笑ってみせるアンジェリカにクリスは少し安心し、肩を竦めて溜息をつく。

「ああ、必ず帰ってくる。ちゃんといい子にしてろよ？ じゃないと、怒るからな」

それを聞き、アンジェリカはくすくすと笑ってみせた。

「父親みたいなことを言うのね？」

クリスはさも当然と答える。

「そりゃ、父親だからな」

二人は耐え切れなくなり、その場で腹を抱えて笑い合う。

笑い尽くした二人は、お互いに見つめ合う。クリスが先に口を開いた。

「一人でちゃんとナオミのところへ帰られるか？」

「ええ、大丈夫よ。私だってもうそんなに小さくないんだから」

少しの間を開けて、クリスがまた口を開く。

「じゃあ、俺は行くよ。気をつけて」

アンジェリカも少しの間を開け、答える。

「ええ、また会いましょう。必ず」

クリスはアンジェリカの元へ近づき、頭を数回撫でる。それから、アンジェリカに背を向け、闇夜の中へ消え入るように歩を進めた。

それを見送るアンジェリカは、一つどうしても言いたかったことをクリスの背中へ向け、叫んだ。

「行ってらっしゃい！ パパ！」

クリスは一瞬歩を止め、肩を竦めるような動作をすると、静かに片腕を宙へ掲げ、それからまた歩き出した。

アンジェリカと別れてから一週間ほど経つ。

あてもなく歩き続けたクリスは、地図に載っているかも怪しい、小汚く閑散とした小さな街にたどり着いていた。

クリスは寂れたバーでカウンター席へ座り、一人酒を飲む。クリスは出来るだけ、一時的だけでも自分に降り掛かってきた心労を振り払いたかった。

しかし、そんなクリスの横へ座る男がそうはさせてくれなかった。

「……隣へ座らせていただこうか」

「勘弁してくれ。俺は今なかなか参ってるんだ。酒の相手ならもっといい奴がいるはずだよ」

クリスの言い分に全く動じることもなく、天使はクリスの横の席へと座る。

「人間というのは実に愚かだ。一時の逃避のために、そんな飲み物で自らを墮落の道へと誘って行く。それは、たまに他人までも巻き込む。嘆かわしい生き物だ」

「そうだな、同じ主に作られたモノ同士もう少し穏やかな言い回しがあるんじゃないか？」

「馬鹿を言うな、下賤な。少なくとも、私は不愉快だ。貴様ら人間と一緒にたにされることなど」

クリスは気分を悪くし、席を立とうとする。しかし、そこへ天使の言葉が遮る。

「お前はまた同じ過ちを繰り返すのか」

「……なんのことだ」

クリスは離れかけた席へ座り直し、天使の話を聞く。

「前にも言ったが、貴様には試練が常に付きまとう。それは、貴様が神同様の存在へとなるために必要な儀礼だ」

「ちょっと待った。前から聞いたかったんだ。どうして、俺が神にならずにちゃいけないんだ。お前の主は引退でもするのか？ 神ってもんは生涯現役なもんじゃないのか」

「……主は既に疲弊しておられる。それは、随分と遠く昔の頃からだ。今直ぐにでも代わりが必要なのだ。そして、お前たちが知らないだけで、これは別に珍しいことでもない。……いいか、貴様がその器に選ばれた。ただ、それだけのことだ」

「随分と勝手に迷惑な話だな。俺の心中も少しは察して貰いたいもんだ」

「ボンクラめ。貴様のような愚鈍な人間には光栄余りある話だぞ。大体、貴様は貴様の意思で私と等価交換の契約を交わしたはずだ。あの実の味をもう忘れたのか」

「忘れられるもんなら、忘れたいものだね。ママのおっぱいの味よりよほど覚えてるぜ」

「その下卑た口を今すぐ閉じろ」

クリスは両手を挙げて、肩を竦める。そして、少しの間を開け、天使へ尋ねる。

「んで？ 同じ過ちとは何のことだ。全く見覚えのない話だが」

天使は少し口を歪ませ、クリスの問いに答える。

「貴様、どうしてあの子供から離れたのだ」

「……なんでアンジェリカの話がここで出てくるんだよ」

クリスは素面に戻ったかのように顔から表情の色を消す。

「貴様には昔サラという女が隣にいた。しかし、貴様はその女と離れ離れになった。それで、その女は一体どうなったのだ？」

天使の言葉に、クリスは身体へ雷が落ちたような錯覚に見舞われた。体中が痺れ、目の前がだんだんと真っ暗へなっていくような感覚。

「そう気を落とすな、人間。どちらせよ、起こる結果は変わらない話だろう。これは貴様が“全てを許せるか許せないか”の試練なのだ」

天使は少し陽気に話す。口元は歪んだままで、どこか愉しげにも見える。

クリスは席から立ち上がり、ズボンのポケットの中からおもむろに掴んだ小銭をバーカウンターに叩きつけた。

クリスは急ぎ足で店の出入口まで歩き、そして一度だけ後ろへ振り向く。

「まず、第一にだ。俺はお前たちの存在を許しはしない」

その言葉を聞き、天使はなににも答えはしなかった。

クリスは店を出てから、ちょうど目の前を走る車に目をつける。そして、その車の前へ飛び出した。

轢かれたクリスはきりもみ状態で地面を転がる。クリスを轢いた運転手は青ざめた顔をして車から出てくる。

そこへ、クリスは何事もなかったかのように立ち上がり、扉の開いた車へ一目散に乗り込む。

「ちょっと借りるぞ。今度ちゃんと返す。また会うことがあればだけどな」

クリスは車のキーを回し、フルスロットルで車を走らせる。

元の車の運転手は口を大きく開けたまま、しばらくその場から動くことが出来なかった。

アンジェリカは一人、街を歩く。

辺りは仄暗い街灯で照らされるだけでは、どこか寂しさも感じられた。陽も沈み、少し肌寒い。

アンジェリカはナオミに頼まれたお使いの途中だった。

クリスと別れてから一週間。アンジェリカはクリスに言われたとおり、熱心にナオミの店の手伝いをしていた。いつか自分を迎えに来る父親を待つため、良い子であろうと誓ったからだ。

アンジェリカは寂しさを紛らわせるために、鼻歌を唄いながらナオミの店へと帰る。
今ここにジェシカがいれば、幾ばくかの不安も拭いきれる気もしたが、流石にクマの人形を持って歩くのは気恥ずかしいものもあり、ため息をひとつ漏らす。
ふと立ち止まり、頭上へ広がる夜空を見上げた。
クリスと最後に見た夜空を思い出す。あの時も、星が綺麗だった。
クリスも同じ夜空を見上げているだろうか。そんなことをしみじみと思う。
我に返り、アンジェリカは歩を再び進める。
アンジェリカの両腕には袋に入ったバゲットがある。ナオミにお使いで頼まれていたものだ。今日の晩御飯はクリームシチューらしい。
アンジェリカのお腹がぐーと情けない声を漏らす。急いで帰ろう。そう思い、アンジェリカは歩くスピードを速めた。
「おや？ アンジェリカちゃんじゃないか」
唐突に、後ろから呼び声がする。アンジェリカは後ろへ振り向くと、そこには見知った顔があった。
「アドニアおじさん」
アンジェリカはこの男を知っている。ナオミの店によく来る常連客だ。物腰が柔らかく、優しい人で、アンジェリカも甘えることがある。こういう人が紳士なのだとアンジェリカは思う。
「こんな時間にどうしたんだい？ もう陽も落ちている、一人じゃ危ない時間だよ」
優しく微笑みながら注意をしてくれるアドニアに、アンジェリカはきちんと答える。
「ええ、心配をしてくれてありがとう、アドニアおじさん。ナオミさんに夜ご飯のお使いを頼まれたの。それで、今がその帰りなの。ちゃんと急いで寄り道せずに帰るわ」
「ああ、そうなのかい？ 引き留めてしまってすまないね。アンジェリカちゃんは良い子だ」
そういってアドニアはアンジェリカの頭を撫でる。アンジェリカは少し恥ずかしそうに目を伏せた。
「じゃあ、おじさん。私は行くわね。またお店で会いましょ」
「ああ……そうだ！ アンジェリカちゃん。ちょっとおじさんの家に寄っていかないかい？ ナオミさんに渡したい物があるんだ。ついでに紅茶でも飲んで行くといいよ」
アンジェリカは突然の提案に逡巡する。店でナオミとルツがきっと私のことを待っている。いつも食事はみんなで一緒に決まっているからだ。
「いや、アンジェリカちゃんは急いで帰っている途中だったね。いきなりこんなことを言ってすまない。……ただ、直ぐにでもナオミさんに渡しておきたい物なんだ。時間は取らせないよ」
アンジェリカは悩む。そして、悩んだ挙句答えを出した。
「分かったわ。アドニアおじさんのお願いだもの。おじさんの家に行くわ」

そう聞きアドニアは微笑む。そして、アドニアはまたアンジェリカの頭を撫でた。

「ごめんよ、おじさんの我が儘に付き合わせて。寄り道になっちゃうね。今度またちゃんとお礼はさせてもらおうよ」

「いいのよ、アドニアおじさん。私はおじさんのお手伝いをするために寄り道をするの。きっと神様も許してくれるわ」

「じゃあ、行こうか」その言葉と共に、アドニアはアンジェリカの手を握り、街の路地裏へと入って行く。

「アドニアおじさんは、その、なんだか暗いところに住んでいるのね」

アンジェリカは不安に耐えきれなくなり、アドニアへ話しかける。

アドニアはなににも答えない。まるで人が違ったようだとアンジェリカは思う。

ふと、アドニアが立ち止まる。辺りはまるで人の気配がなく、暗澹とした闇が立ち込める。

アンジェリカは名状し難い恐怖に駆られた。

「あの、アドニアおじさん。私、やっぱり帰る……帰るから、手を、手を離して！！」

アンジェリカは叫ぶ。半ばパニックに陥っている。だが、その叫びに駆け付ける者は誰もいない。

ここでようやくアドニアが口を開く。

「僕の家は少し汚れていてね。すまないけれど、ここで我慢してくれ」

言うがままに、アドニアはアンジェリカへと抱きつき、地面へと倒れ込む。アンジェリカの身体に激しい痛みと悪寒が走る。

「やあ、やめっ！ 離して！ だめっ、助けて！！」

アンジェリカの叫びは無情にもアドニアの唇で封じられる。

「ふっ、うん……っ！ だ、ダメ……っ！ どうしちゃったの、アドニアおじさんっ！」

「ずっとアンジェリカちゃんのことを好きだったんだ。ずっと、ずっとさ。ずっと見てたんだ。僕はアンジェリカちゃんと結婚がしたい。愛してる。大好きさ。愛してる。結婚しよう」

アンジェリカにはアドニアのことは悍ましい呪詛のように聞こえた。限界だった。アンジェリカは喚きながら暴れまわる。しかし、相手はアンジェリカの身体を大きく上回る体躯を持った大人だ。

アンジェリカの四肢は強い力で押さえつけられ、ついには身動きひとつ出来なくなってしまう。

アンジェリカは涙を溢す。

「やめてよぉ……。どうして、どうしてっ、こんなことするの。いつもの、アドニアおじさんに戻ってよぉ……」

アンジェリカの哀願に、アドニアは答えることは無かった。

アドニアはアンジェリカの着ている服を無理矢理に剥ぎ取る。アンジェリカは恥ずかしさと恐怖と混乱とで、抵抗することは無かった。

「綺麗だ、綺麗だよアンジェリカちゃん！　美しい！　陶器のような白い肌だ！　汚れも！　傷一つもない！　これは芸術だ！」

アンジェリカは泣きじゃくり、なにも答えない。

ただ、心の中で助けを呼ぶ。叫び続ける。

(クリス……！　クリス……っ！　クリスう……っ！！)

「味も確かだ。仄かに香る汗の臭いも最高のスパイスだ。食べてしまいたいぐらいだよ、アンジェリカちゃん」

そう言いながら、アドニアはアンジェリカの身体中をその舌で舐めずり回す。

そして、準備は整ったと言わんばかりに、アドニアは自分の獣のようにいきり立った陰部のソレをズボンから乱暴に取り出す。

「さあ、アンジェリカちゃん。おじさんと一つになろう。少し痛いかもしれないが、我慢しておくれよ」

アドニアはアンジェリカの下着を無理やり脱がし、自分のソレをアンジェリカの陰部に擦りつける。

「やめ、てよオ……っ！　どうして、どうして、どうしてッ！」

迫り来る恐怖にアンジェリカは声を上げる。あるだけの力を振り絞り、身をよじる。しかし、必死の抵抗が叶うことはない。

「大丈夫、大丈夫だよ。アンジェリカちゃん。おじさんが一緒にいるからね。なにも怖くない、怖くないんだよ」

アドニアはアンジェリカは優しく抱きしめる。それから、自分のソレをアンジェリカへと勢いよくぶち込んだ。

「いやああああっ！！　やあっ！！　いやあああああアッ！！」

アンジェリカは狂ったかのように慟哭の叫びを上げる。それに対して、アドニアは満面の笑みを浮かべる。

「ああ……、なんてアンジェリカちゃんの中は優しく温かいんだ。優しく包まれるように……ん？　んんッ!?」

瞬間、アドニアの顔がサッと青ざめていく。何か、重大な事に気づく。

「アンジェリカちゃん、君はもしかして……処女じゃないのかい？」

アンジェリカは何も答えない。ただただその顔に涙を浮かべ、恐怖を訴え続ける。

アドニアの全身の毛が逆立つ。憤怒の化身となり、鬼の形相でアンジェリカに叱咤する。

「よくも騙したなこのアバズレビッチがアァああッ！！　糞が糞が糞が糞が糞があッ！！」

アドニアは平手で何度も何度もアンジェリカの顔をぶつ。アンジェリカの顔は唇が切れ血が滲み、どんどんと腫れ上がり、見るも無残な形となっていく。

「糞が糞が糞が死に腐れ畜生がッ！！　今の貴様に息をする資格も無ければ、生きる価値すらないッ！！　死ねえッ死ねえッ死ね死ね死ねッ！！」

罵詈雑言を喚き散らしながら、アドニアはアンジェリカを犯し続ける。アンジェリカの

口からはもう、哀願の叫びが漏れることも無かった。人形のように、成すがままに、アンジェリカの身体は壊されていく。

アンジェリカは自分に救いが無いことを悟る。朦朧とする意識の中、色々な事に思いを馳せる。

ナオミのこと、ルツのこと、死んだ母親のこと、そして、クリスのこと。アンジェリカはもう一度だけ、大きな涙を溢し一縷の希望に願いを込める。

(クリス……！ 助けて……っ！)

「アンジェリカああああああああああああッ！！」

突然の事だった。アンジェリカは聞こえてきたその声に奮い立つ。どうして、分からない。気のせいなのかも、いや、間違いない。もう二度と聞くことが無いと諦めいたその声が、今確かにこの耳に聞こえたのだ。

アンジェリカは残った力を振り絞り、大音声で必死に叫ぶ。

「クリスーーーーっ！！」

こちらへ向かって走ってくる足音が聞こえる。アンジェリカは涙を流す。それは絶望から来るものではなく、安堵と喜びの涙だった。

「クリスーーーーっ！！ クリスーーーーっ！！」

アンジェリカは自分の居場所を伝えるために必死に叫び続ける。その度、足音が近づいてくる。アンジェリカの顔に自然と笑みが溢れる。しかし、

「黙れ」

アドニアはアンジェリカの喉元を隠し持っていたナイフで一刺しする。そして、止めと言わんばかりに腹部へもう一刺し。

アンジェリカの口からコポオと嫌な擬音と共に、ドス黒い血が溢れ出る。

「君にはもう用は無い。さようなら、アンジェリカちゃん。いい夢を」

アドニアは立ち上がり服装をサッと正した後、闇夜に紛れるようにその場を去っていく。

「アンジェリカーーーーっ！！」

クリスは先日までアンジェリカたちと暮らした街まで舞い戻ってきていた。“借りた”車は街の路端へ投げ捨て、まずはナオミの店へと急いで向かった。

ナオミから話を聞くと、アンジェリカはお使いに出たまままだ戻ってきてはいないらしい。クリスの脳裏にいよいよ嫌な予感が渦巻き始める。

そのままナオミの店を飛び出したクリスは、街中を走り回ってくまなくアンジェリカを探す。居ても立っても居られない、クリスは大声でアンジェリカの名を叫びながら探し続ける。

「アンジェリカああああああああああああッ！！」

返事は返ってこない。クリスは膝に手をつき、立ち止まってしまう。焦りが募る。心臓の鼓動が不安を煽るように早まる。クリスは全てに押しつぶされそうになった。

「クリスーーーーっ！！」

そんな時だった。クリスの耳には確かにアンジェリカの声が聞こえた。ここからそう遠くはない。クリスはアンジェリカの声が聞こえた方向へ、無我夢中となって走りだす。

「アンジェリカーーーーーっ！！」

クリスは叫ぶ。今助けに行くと。迎えに行くと。もう離したりはしないと。誓いを込めた叫びだった。

「クリスーーーーーっ！！ クリスーーーーーっ！！」

クリスは走る。いよいよアンジェリカの声が近くなる。会ったらすぐにでも抱きしめてやろう。クリスはそう思った。

「アンジェリカっ！！」

クリスは立ち止まり周りを見渡す。きっとこの辺りのはずだ。クリスはゆっくりと歩き出し、慎重に目を配らせる。嫌に暗い場所だった。街灯もなく、人の気配もない。

ゴツン、と何かにクリスは躓く。鈍く、しかしどこか柔らかい何かに、躓く。クリスは息を飲んだ。膝から崩れ落ちるように、その場にしゃがみ込む。

「アン、ジェリカ……？」

暗くてその顔はよく見えない。しかし、それは間違いなく、どんなに歪んでいようと、どんなに汚れていようと、愛娘の顔だった。

「おい……アンジェリカ……アンジェリカっ！」

クリスの双眸から自然と涙が溢れる。クリスはまた失ってしまったのだ。最愛の人を。

「ク……い、す……」

クリスはハッと我に返った。アンジェリカの口が動いたのだ。アンジェリカの命の炎はまだ消えてはいなかった。

「アンジェリカ！ 良かった、今すぐ医者のところへ連れて行ってやるからな！ もう少しの辛抱だ！」

クリスはアンジェリカを抱きかかえる。今直ぐにでも立ち上がり、走りだそうとしていた。しかし、

「グ……い、すっ……。わ、たしば……。もぁ……」

クリスはアンジェリカの異変に気がつく。腹部、そして喉元にナイフで穿たれたような穴。そこから大量の血が溢れ出ている。素人目に見ても、状況は絶望的だった。

「もういい。しゃべるな、アンジェリカ！ 大丈夫だ、大丈夫だから。パパが助けてやる、必ずだ！ 俺を信じろ！」

アンジェリカはそれを聞き、力の無い笑顔を見せる。クリスも涙を流しながら、出来るだけの笑顔を作ってみせた。

「わ、たし……。ね、……。とても、しあ、わせ、だったわ……。クリスに、であえて、とても……」

クリスはアンジェリカの命の灯火が揺れて消えかけているのを悟る。しかし、それを受け入れることなど到底できなかった。

「もういいんだ！ 頼むから、喋らないでくれ……！ 必ず、必ず、助けるから……っ！」

アンジェリカはゆっくりと片腕を持ち上げ、クリスの顔へ手を触れる。

「生きていて、とてもよかった……あなたと、であえて、そう思えたの……。んっ、グっ……。だか、らね、……。最後に、私のわがママを、きいて？」

クリスは目を瞑る。もう、アンジェリカの顔を直視することが出来なかった。

「ああ……。ああ、いいとも。いくらでも、聞いてやるさ。何が、して欲しいんだ？」

クリスは精一杯の優しい声で答える。全てを、受け入れる準備が出来てしまった。

「最後まで、私を抱きしめて。こわいの。だから、最後まで。一緒にいてくれる……。？」

クリスは目を開き、溢れる涙を拭った。そして、笑顔で言う。

「ああ、いつまでも一緒だ。俺はお前を、アンジェリカを、離しはしない」

クリスはアンジェリカを強く、強く、抱きしめた。アンジェリカは幸せそうな笑みを浮かべる。

最後に、アンジェリカはクリスの耳元で囁く。

「大好きよ、パパ……」

それから、アンジェリカが口を開くことは無かった。

クリスは慟哭の雄叫びを上げる。その雄叫びは、街の闇に、悲しく溶けこんでいった。

「その子供を殺したのは、一人の男だ。その男は人殺しという罪を犯した。しかし、どうだろう。彼は昨年に事故で妻を亡くしている。よくある通り魔殺人だ。巻き込まれたその妻は凄惨な死を遂げた。その事件以来、彼の中にある何かのたがが外れてしまったのだろう。さて、では聞こう。罪の所存はどこにあるのだろうか？ 諸悪の根源を辿っていけば、それはどこまでも根深く、無限に続いていくだろう。お前たちは元来から罪人なのだ。ならば、お前たちは許さなければならない。全ての物を、全ての事を。そうして、初めて自分も許されるのだ。クリス、貴様もそうだ」

クリスとアンジェリカの傍には、いつの間にか天使がいた。

「……。これが。これが、お前たちのやり方なのか」

クリスは憤然とした態度で天使を睨みつける。しかし、天使が恐れおののくことはない。

「違うな。これはお前の犯した罪の代償だ。その双眸で己の運命をしかと焼き付けろ。そして、受け入れる。前へ進め。貴様は神になる男なのだ」

クリスは黙りこむ。その腕に抱かれたアンジェリカを見つめ、己の運命を噛みしめる。

「確かにこれは試練でもある。貴様が乗り越えなければならない試練だ。しかし、これはお前という存在が引き起こした必然でもある。誰を恨むわけでもなく、自分を呪え。そして、その自分さえも許すのだ。そうすることで貴様はひとつ前へと進める」

クリスはなにも答えない。しかし、拳を握りしめ、ひとつの決心を固める。

「俺は、何も許しはしない。アンジェリカを襲ったその男も。お前たちのような存在も。アンジェリカから離れてしまった自分自身もだ。世界の理がそうであっても、俺は抗い続ける。運命だろうと、試練だろうと知ったこっちゃない。俺は、抗い続けるぞ。そし

て、これが俺の答えだ」

クリスは自分の唇噛む。すぐに血が滲み出てきた。そして、その唇をアンジェリカの唇に重ねあわせた。

「なっ！？」

初めて天使が驚きの顔を見せる。その行為にどのような意味があるのか、天使は知っていたからだ。

クリスもこの力を授かってから、頭の中で理解していた行為だ。どうしてなのか、知っている。だが、この行為がどれほどの禁忌なのかも理解していた。

しかし、アンジェリカの体温がまだあるうちに。迷っている時間などない。迷う道理などない。自分は抗い続けると決めたのだから。

「貴様ッ！！　それがどういう行為なのか分かってやっているのか！？」

クリスは舌を這わせ、出来るだけ自分の血をアンジェリカに分け与える。十分に血を分け与えたあと、アンジェリカの身体をそっと地面に寝かせる。

そして、クリスはゆっくりと立ち上がった。

「これが、俺の答えだ」

天使は一步後ろに退いた。しかし、すぐに狂気を孕んだ笑い声を上げる。

「ふふ、ふはははははははっ！！　貴様は大馬鹿者だな！！　なんと愚かしい真似を！！

貴様自身が知っているはずだ、“定命の者の理”から外れる苦しみを……！　貴様は自らの手で巻き込んだのだ、己の運命にその娘を！　子は貴様をいずれ憎むだろう。恨むであろう。なぜそうしたと問いたですであろう。　まあ、良い。主は、我々は常に貴様らを見ている。貴様に試練はまだ続く。その火の粉はその娘へも襲いかかるだろう。自身の“その名”を忘れるな、クリス。くれぐれも、後悔のないように」

言って、天使はそのまま光の粒となって消えていく。場にボツリとアンジェリカとクリスだけが取り残された。

「不思議なものね。あれだけ痛い思いをしたのに。傷ひとつ残ってないわ」

アンジェリカは淡々と独り言のように話す。運転席にいるクリスは窓を開け、タバコに火を着けた。

「……それ、やめるって言ってたじゃない」

「……しょうがないだろう？　車の中に入ってたんだから。吸わなきゃ湿気ちまう」

あの事件から2日が経った。アンジェリカは生きている。これからも、永遠に。

あの事件の後、すぐにクリスはアンジェリカをナオミの店まで運んだ。ナオミは血で染まったアンジェリカを見て、驚きの声を上げた。しかし、クリスが神妙な顔で「大事には至っていない。怪我もない」と伝えると安心した顔を見せ、それ以上はなにも聞いてはこなかった。

その翌日、例の屋根裏部屋で目を覚ましたアンジェリカは酷く混乱していた。自分になにが起こったのか、自分がなぜここにいるのか。クリスはそんなアンジェリカをまずは抱き

しめた。そして、起こった全ての顛末をアンジェリカに話す。天使にまた出会ったこと、自分の血をアンジェリカに分けたこと、それ故に不老不死になってしまったこと。クリスはアンジェリカに謝り続けた。この先、アンジェリカに待っているのは過酷な運命だ。状況が状況だったとは言え、クリスはアンジェリカに一生恨まれ続けても仕方がないと思った。しかし、当のアンジェリカは憮然とした顔でクリスの額にデコピンを食らわす。

「バッカじゃないの。いい？ 私はまたクリスと出会えた。そして、これからずっと私たちは一緒なの。なら、ここは笑って喜ぶところよ？」

アンジェリカはベッドの上からクリスの頭を優しく包み込むように抱きしめる。

「私がクリスを恨むことなんて無いわ。今も、これからも、ずっとね」

クリスは少し気の抜けたような笑みを浮かべ、アンジェリカを抱きしめかえした。

そして、そのまた翌日。それが今日だ。アンジェリカとクリスは荷造りをしてナオミの店から出ることにした。

ナオミはどこか悲しそうな顔をして二人を見送ってくれた。「いつでも戻ってきていいのよ。私たちはもう家族なんだからね」そう言ってアンジェリカを抱きしめる。アンジェリカもそれに応えた。

「あんたはもう戻ってくるんじゃないよ。あんたからはどうも疫病神の臭いがする」

ナオミから最後に送られた言葉が非常に辛辣なもので、クリスは肩を竦めたため息をつく。

それから、二人は車に乗り込み、街を飛び出した。そして、今に至るのだ。

「ところで、この車。誰のものなの？」

「ん？ あー、その、なんだ。友達から借りたんだ。今度ちゃんと返さないとな。……会うことがありゃな」

車はあてもなく進む。クリスはこの状況に、どこか懐かしさを感じてフツと笑ってみせる。

「ねえ、パパ。私、お腹がへったわ」

「……その呼び方はやめろ。なんか、恥ずかしいだろ」

アンジェリカは不敵にニヤリと笑う。

「ねー、パパ。ねえねえ、パパ？ 私、お腹が減っちゃったなー。パパもそうでしょ？」

「ああー！！ もう、うるせえ！！ 分かったから！ 分かったからやめろ！」

「んー？ なにが分かったの、パパ。ねえねえ、パパ、パパ」

クリスはげんなりとした顔をして車を止めた。

「……分かった、降参だ。レストランに行こう。ナオミからもちょっとだけ金貰ったしな。あと少しだけ我慢しろ」

再びクリスは車を走らせる。車のグローブボックスに入っていた地図を頼りに近場の街を探す。

「でも、良かったわ。私、クリスにもうひとつお願いがあったの」

なんの話だ？ と聞きかけて、アンジェリカが死に際に言ったわがママを思い出した。

「まだ俺にわがまを言いたいのか？」

「わがまというか、これは私とクリスが交わした約束よ？」

クリスは何のことか思い出そうとした。そして、意外とあっさりその約束を思い出した。

「行き先はどちらまで？」

「世界の果てまで」

クリスは応えるように車のエンジンを吹かす。開けた窓から気持ちのよい風が車内を包み込む。

この子とどこまでも一緒にいよう。それが、世界の果てであろうと。

クリストファー（Christopher）は、英語、デンマーク語の男性名、姓。「キリストを運ぶ・担うもの」を意味する。